

氏名	小 南 一 郎 こ みなみ いち ろう
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 410 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	楚辞とその注釈者たち

論文調査委員 (主査) 教授 礪波 護 教授 池田秀三 教授 平田昌司

### 論 文 内 容 の 要 旨

伝統的な楚辞研究は、『史記』屈原伝の記載を信じ、楚辞の主要な作品を、そこに記載される屈原の伝記的事実に沿って解釈しようとするものであった。屈原を、忠義を懐きながら不遇であった詩人だとする古くよりの解釈から、愛国詩人として屈原を賛美する現代中国の文学史まで、そうした楚辞文学の理解が主流を占めてきたのである。ただ、そうした解釈は、忠臣の不遇だとか愛国詩人だとかいうドグマが先にあって、それにあてはめて作品を読もうとしたもので、楚辞の本文自体が語っているところに十分に耳を傾けたものではなかったように見える。

そうした伝統的な楚辞理解に対する疑義は、古くより懐かれて来たのであるが、民国時代の学者たちが、それを実証的に論じようとして以来、屈原伝説と切り離して、楚辞の文学を理解しようとする試みが、幾人かの学者によって積み重ねられて来た。本論文も、楚文化圏における楚辞文芸の伝承という視点から、楚辞文学を、作品の内容として表明されているものを通して、もう一度、読みなおそうとする試みである。

「序章 楚辞文芸の編年」では、楚辞の文学を屈原伝説と切り離して理解しようとする試みのうち、主要なものを紹介した。楚辞の諸作品を屈原と結びつけて理解している限り、楚辞の作品は、みな戦国中期から後期にかけての、きわめて短い期間の中における創作ということになり、個々の作品の時代判定は大きな問題とはならない。しかし、楚辞作品を屈原という人物と切り離してしまうとき、それぞれの作品がいつの時代に、どのような前後関係で成立したのかを判定する必要がでてくる。楚辞諸作品の間にある、それぞれの作品成立の時代的前後関係の想定は、楚辞文芸の歴史的展開過程をいかに理解するかに関わってくるのである。本章では、これまでに提出された楚辞諸作品の編年案のうち、主要な説を検討し、その最後に、本論文が想定している楚辞文芸の時代的変遷を、前期(九歌、招魂)、中期(離騷、天問)、後期(九章甲類、遠遊、九辯、大招、卜居、漁父など)の三つの時期に分けて示している。

「第一章 楚辞の時間意識——九歌から離騷へ」は、楚辞文芸の前期から中期にかけての変遷を、この時期に属する作品の中に表されている時間観念を中心にすえて、検討したものである。楚辞文芸のもっとも古い様相を反映していると考えられる、九歌の中の祭祀歌謡的な作品には、ゆるやかに流れる時間が表現され、その中における人々の喜ばしげな感情が表明されている。しかし、やがて、そうした喜ばしい時間は次第に過去のものとなってゆく。本質的には祭祀歌謡でありながら、神々が人々の希望の通りには降臨しないことを嘆く歌が多くなり、神々とともにあるときに実現する緩やかな時の流れを喪失してしまったことへの哀惜の表明が作品の中心を占めるようになるのである。

楚辞中期を代表する作品が離騷篇であるが、離騷篇の主人公は、時間に追い立てられるようにして遍歴を重ねる。時間の経過は、人々の希望を踏みにじってゆくと捉えられているのである。地上世界で不遇であった主人公は、天界遊行に出発するが、天上世界においても主人公は受け入れられることがない。天界遊行が、二重構造になっていることを指摘し、主人公は、二番目の遊行の最後に“舊郷”を見いだし、そこで失われた時を再発見するのであるが、それは、地上のすべてを放棄することによってはじめて獲得されるという性格の時間であったとの想定を述べている。

「第二章 天問篇の整理」では、これも楚辞文芸の中期に属すると推定される天問篇を分析している。天問篇は、天地や

歴史についての質問を重ねるといふ、特殊な形態と内容とを備えた作品である。この作品の内部がいくつもの、独立性を備えたかたまりから構成されており、それぞれの部分が形成されるについて、時代差があつて、そうした時代差は、質問の内容の差異として表明されると同時に、句形の相違にも表明されていることを指摘する。同時にまた、こうした特殊な形態の文芸を生み出す背景には、神話や歴史を伝承する巫覡的な性格の集団が存在したであろうこと、その集団内部での教育伝承が天問篇の成立に直接に関わつたであろうことを推定している。その集団の性格が歴史的に変化したことが、天問内部の質問の質的差異に反映しているのである。

天問篇の伝承者たちが、最終的に問題にしたのは、歴史の中に表明される天命の性格についてであつて、天命に対して提出される疑義は、司馬遷『史記』の「天命は是か非か」という歴史意識にも通じてゆくものであつたことも指摘している。

「第三章 楚辞後期の諸作品」では、楚辞文芸の後期の作品をいかに性格づけることができるかを検討している。特に楚辞後期作品に顕著である道家思想的要素、その中でも“遊”の観念とそれにとまなう幻想との検討から、楚辞後期作品の展開を追跡しようと試みている。遊とは天界や異域への遊行の描写を通して、精神の自由な飛翔を記述するものであつて、元来は、楚辞文芸の背後にあつたシャマニスティックな宗教芸能に由来するものであり、一方で道家・神仙思想とも密接な関連をもっている。

離騷篇に描かれている、主人公の天上遊行は苦痛に満ちたものであつた。しかし、楚辞の後期作品に属する遠遊篇では、天の門は主人公の前に簡単に開けられ、主人公は天界遊行を楽しみつつ、天の最高頂にまで昇る。後期の作品では、すでに離騷篇などに表明されていた苦痛に満ちた彷徨の意味するものが十分には理解できなくなっているのである。一方で、楚辞の後期には、古い楚辞文芸の表現と屈原伝説の枠組みとを援用して、知識人の不遇を嘆く作品が作り続けられるが、そこに表現されている苦悩には必然性が乏しく、無病の呻吟と評される作品しか生み出せなくなってしまう。このようにして、楚辞は、後漢時代の半ばころに、その独自の文芸活動を終えたのである、と想定している。

「第四章 王逸『楚辞章句』をめぐる——漢代章句の学の一側面」では、現存する楚辞の注釈のなかで最も古いもので、ちょうど楚辞文芸が独自の活動を終える、後漢時代の中期に編纂された王逸の注釈には、その形態から二種類の性格の異なる注釈が混淆している。普通の訓詁形式による注釈のほか、注釈自体が韻文をなしている特殊な形態の注釈が含まれており、この韻文形式の注釈が、古くからの楚辞文芸内部で伝承されてきた作品解釈の方法であつたと推定される。そうした古い形態の注釈を遺しつつ、王逸が一方で、彼自身の持つ方式で注釈を加えたがために、「楚辞章句」には、二種類の異なつた形態と性格の注釈が混在することになった。そして王逸は、楚文化圏における楚辞文芸内部の伝承と、より対象化して楚辞作品を見る中原地域の楚辞文学の伝統とを結合させて、「楚辞章句」を編んだ、と論じている。

楚辞の注釈書は数多い。第五章と第六章では、そうした中から、特徴的な内容を備えた二つの注釈を取り上げて分析を加えている。それぞれの時代に楚辞がどのように読まれたのかを、それぞれの注釈者の注釈姿勢の中から探ろうとしたのである。

「第五章 朱熹『楚辞集注』の編纂」では、儒家の思想家で独自の理学（朱子学）の体系を作り上げた朱熹が最晩年において編纂した「楚辞集注」について述べる。儒家の中庸の観念に背くところが多い楚辞の文学に朱熹が特に興味をもつたことについて、当時からさまざまな取り沙汰があつたが、論者は、楚辞の文学が朱熹の若年のころからの愛好の対象であつたことを確かめるとともに、最晩年になって、楚辞がそれまで以上に朱熹にとって重い意味を持つようになり、そうした新しい楚辞把握を定着するために、朱熹が「楚辞集注」を著したことを論じている。朱熹の楚辞注釈は、中国近世の儒家的知識人の意識と価値観とを典型的なかたちで示すものであると言う。

「第六章 汪瑗の楚辞観——『楚辞集解』を中心にして」では明代の汪瑗の注釈である「楚辞集解」を取り上げて、分析を加えている。汪瑗は歙県新都の人。明代の歙県は、山西商人と並んで大きな勢力を持った、新安商人たちの根拠地として有名である。汪瑗自身は、学者・文学者として生涯を送つたのであるが、そうした文化活動が可能であつた背景には、汪氏一族の商業資本があつたと推測される。汪瑗の文芸理解や、より広く文化現象理解の姿勢にも、中国近世商人階層の、自由で囚われるところの少ない、論理が反映していると考えられる、と指摘している。

汪瑗の楚辞注釈の中には、楚辞作品を、屈原の悲劇的な生涯と結びつけて読むことを排し、日常的な環境の中で作られた、日常的な言語表現なのだとして位置づけているところに独自の視点がある、そうした汪瑗の楚辞注釈は、清代になると、単なる

思いつきにすぎない、実証性を欠いた議論だとして批判を受け、やがて忘れ去られてゆく。しかし、伝統や権威に囚われない楚辞の読み方や、親密感をもって古典に問いかけようとする姿勢は、現在もなお、参考にすべきところが多い、と述べている。

### 論文審査の結果の要旨

中国戦国時代の楚国で作られたと伝承される韻文作品群『楚辞』は、基調となっている“鋭さ”表現の内に盛られた情念を、その作者とされる屈原の伝記と結びつけて読まれることが多かった。中国が外国の軍事的侵略に晒された20世紀において、その傾向がいつそう強化された結果、「愛国詩人屈原」とその作品、という評価すら生まれるにいたっている。

論者は、作品としての『楚辞』を、屈原の歴史的伝承からひとまず分離する視点を1973年の著書『楚辞』（筑摩書房）で表明し、日本の中国文学研究に小さからぬ影響を与え、西洋文学研究者からも注目をあびた。その後、中国文献学のみならず、東西の民族学や芸能史の成果をも取り入れた名著『中国の神話と物語り』（1984年、岩波書店）と『西王母と七夕伝承』（1991年、平凡社）の両著に纏められた諸論考を発表するかたわら、数年ごとに『東方学報』などに公表してきた楚辞関連の長大にして重厚な論文を踏まえ、現時点での論者による『楚辞』論の全体像を提示しつつ、中国古代文学研究の方法論自体を披瀝したものが本論文である。

全体は、『楚辞』の諸作品自体を扱った「序章 楚辞文芸の編年」から「第一章 楚辞の時間意識——九歌から離騷へ」「第二章 天問篇の整理」「第三章 楚辞後期の諸作品」までと、漢代から明代に至る約千四百年間の注釈形態に表れている思潮変化をとらえた「第四章 王逸「楚辞章句」をめぐる——漢代章句の学の一側面」から、「第五章 朱熹「楚辞集注」の編纂」「第六章 汪瑗の楚辞観——「楚辞集解」を中心にして」までの二つに、大きく分かれる。

前半部、まず序章では、民国時代の新文学運動の担い手の一人であった胡適が論証した文献学の成果や、Oxford 大学の David Hawkes によってなされた楚辞テキストの形成過程をめぐる分析と仮説に最大の敬意を表した上で、「それぞれの作品を、それが形成された時代と社会的な環境との中に返して理解しようと努める」作業として、楚辞作品成立の前後に関する編年案、すなわち前期（九歌、招魂）、中期（離騷、天問）、後期（九章甲類、遠遊、九辯、大招、卜居、漁父など）が示される。根拠とされるのは、作品自体にみられる歴史意識・宗教意識・作品形式などの分析である。このうち、天問篇を離騷篇と近い時代におく視点は、論者によって初めて示された。この編年は、先行の諸研究のみならず、近年の出土文献にも目を配ってなされており、今後の研究にあたり一つの基点となるであろう。

第一章から第三章までは、上記の編年の裏付けとなる部分である。前期・中期作品の間に存在する時間意識の差異を、「終」「古」「逍遙」「舊」「遊」などの語彙の用例にもとづいて詳細な分析を加えた部分や、天問篇にみられる〈錯乱〉が口頭伝承段階の「質問のかたまり」に由来した貴重なものであることを検討した部分が、特に注目される。

後半部の第四章から第六章は、注釈の編纂を通した『楚辞』の伝承の継承を主たる対象とし、論者の文献学的力量をよく示す部分である。なかでも圧巻なのは、王逸注の内部に認められる注釈様式の違いを取上げた第四章である。王逸注の様式に韻文・非韻文ふたつの類型があること自体は、『楚辞』を通読すれば容易に気づかれるが、そこに両様式の「役割り分担」や、王逸注以前に存在した旧注の名残を読み取っていく論証過程は、極めてスリリングであるとともに、説得力がある。また王逸の手になると信じられてきた各作品の序に、古層の伝承が保存されているのではないかとの問題提起も興味深い。第四章は『楚辞』研究の枠を超えて、中国における著作の歴史自体にかかわる創見を数多く含み、本論文の中で将来にわたり大きな影響を与えていく部分であろう。南宋の朱熹と明の汪瑗を取り上げた第五章と第六章は、宋人と明人の態度の違いを、注釈を通じて論じた一続きの論考として読むことができる。

以上の注釈史研究に、洪興祖『楚辞補注』、清代の諸注釈、近代の注が加わるならば、『楚辞』注釈を通してみた中国著述史となるはずであって、さらに十年あるいは二十年の歳月を要するやもしれぬが、論者によるその完成が強く望まれる。

全体に互り、原典に対する精密な読みから問題点を見だし、[大胆な仮説、細心の実証]を経て、結論に至る研究手法は、論者の“鋭さ”をよく示している。また、緻密な考証の手続きを取りつつも、同時に論者の情念、精神史に関する思索の継続も感じさせる点こそ、本論文の大きな魅力の一つであることも、強調しておくべきであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。

2001年1月26日，調査委員3名が試験を行った結果，合格と認めた。